藤ヶ森遺跡

－県営ほ場整備事業に伴う発掘調査－

1999

長岡市教育委員会

序

この報告書は、県営ほ場整備事業山北第三地区事業実施に伴う藤ケ森遺跡発掘調査の記録です。

藤ケ森遺跡がある地域には、長岡市側に横山遺跡や原山遺跡、見附市には高稲場遺跡や岩沢遺跡など、弥生時代の集落遺跡が東山丘陵沿いに数多く存在します。藤ケ森遺跡は長岡市最北端の弥生遺跡で、平成８年度の確認調査で丘の上から新潟県初の墳丘墓が２基発見されました。

今回の発掘調査は、墳丘墓の下に広がる畑を対象に行い、弥生時代後期の竪穴住居跡と方形周溝墓を発見しました。長岡市において方形周溝墓の発見は、藤ケ森遺跡の南側にある横山遺跡に次ぐもので、墳丘墓と合わせてこの地域における弥生時代の墓の在り方を考えるうえで貴重な発見となりました。

なお、墳丘墓は県営ほ場整備事業の一環で整備する農村公園の一角に、現状のまま保存されることになりました。これには新潟県長岡農地事務所と地元の山北ほ場整備協議会などの、埋蔵文化財保護に対する深い御理解によるもので、このことは弥生時代の墳丘墓研究に大いに寄与するものと考えられます。

最後に、今回の調査に当たって新潟大学名誉教授甘粕健先生、地元亀崎町の田井忠栄氏、事業主体の新潟県長岡農地事務所、山北ほ場整備協議会、山北土地改良区、亀崎町町内会をはじめ、多くの関係者から多大な御指導や御協力をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

平成11年３月

長岡市教育委員会

教育長　大西厚生

例　　言

1　本書は、新潟県長岡市亀崎町字藤ケ森にある藤ケ森（とうがもり）遺跡発掘調査の記録である。

2　藤ケ森遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備事業山北第三地区事業実施に伴って、事業主体の新潟県長岡農地事務所からの依頼を受けて、長岡市教育委員会が行った。

3　発掘調査の経費は、新潟県長岡農地事務所と長岡市が費用負担契約を締結して、ほ場整備事業経費のうち農家が負担する９％相当額を長岡市が文化庁からの国庫補助金と県費支出金の交付を受けて負担し、残りの91％を新潟県長岡農地事務所が負担した。

4　発掘調査は、長岡市教育委員会職員の駒形敏朗が文化財保護法上の調査担当者として行った。調査組織は次のとおりである。

調 査 主 体：長岡市教育委員会
調査担当者：駒形敏朗（科学博物館副主幹）
調　査　員：鳥居美栄（科学博物館学芸員）
調査補助員：相田智子（新潟大学卒業生）
調査作業員：長岡市亀崎町有志・長岡市民
事　務　局：科学博物館（館長　渡辺　央）

5　発掘調査で出土した遺物及び測量図面並びに写真等の記録は、長岡市教育委員会が保管している。

6　遺物に出土位置等の記入は、トウガモリー取り上げ番号ーグリッド（もしくは遺構番号）の順である。

7　報告書の作成には、駒形・鳥居・相田が、整理作業員の補助を受けて図版の作成から本文の執筆まで行い、調査担当者の駒形が全体をまとめた。

なお、本文は駒形・鳥居・相田が分担して執筆したもので、文末に執筆者の氏名を明記した。氏名の記載がない箇所は駒形が執筆した。

8　挿図のうち、地形図等で方位の記入がないものは、真北を図の上にそろえた。また、遺構平面図の方位は磁北を指す。遺構断面図脇の数字は、標高（単位：メートル）である。

9　藤ケ森遺跡の発掘調査には、現場での発掘から本書の作成まで、数多くの方々や機関から御指導・御協力をいただきました。氏名等は特に明記しませんが、ここに心からお礼を申し上げます。

目　　次

1　発掘調査に至るまで……1

2　環　　境……2

3　発掘調査の経過……3

4　遺　　構……4

（1）竪穴住居跡　（2）掘立柱建物跡　（3）方形周溝墓

（4）ピット　　（5）溝　跡

5　遺　　物……11

（1）土器　（2）石鏃　（3）管玉

6　墳　丘　墓……13

7　ま　と　め……13

挿　図　目　次

第1図　藤ケ森遺跡位置図及び周辺の弥生遺跡並びに古墳群……1

第2図　藤ケ森遺跡周辺の地形及び弥生遺跡……2

第3図　藤ケ森遺跡の地形……3

第4図　遺構全体図……5

第5図　竪穴住居跡……6

第6図　掘立柱建物跡……7

第7図　方形周溝墓……8

第8図　ピ　ッ　ト……9

第9図　溝　　跡……10

第10図　玉・石鏃……11

第11図　出土土器……12

第12図　墳　丘　墓……14

写　真　目　次

写真1　藤ケ森遺跡遠景（北東から＝左に墳丘墓の丘、西から、近景＝発掘中）

写真2　墳丘墓（近景＝発掘現場から、第1号墳丘墓、第2号墳丘墓）

写真3　発掘風景（表土除去及び遺構確認作業、遺構発掘、竪穴住居跡発掘）

写真4　竪穴住居跡（全景、ピット内の土器出土状況、炉跡周辺の炭化材）

写真5　掘立柱建物跡、方形周溝墓（東から、北から）

写真6　焼土ピット（全景、土器出土状況、石鏃出土状況）

写真7　ＩＤ－Ｐ３（全景、土器及び碧玉出土状況）、管玉出土状況

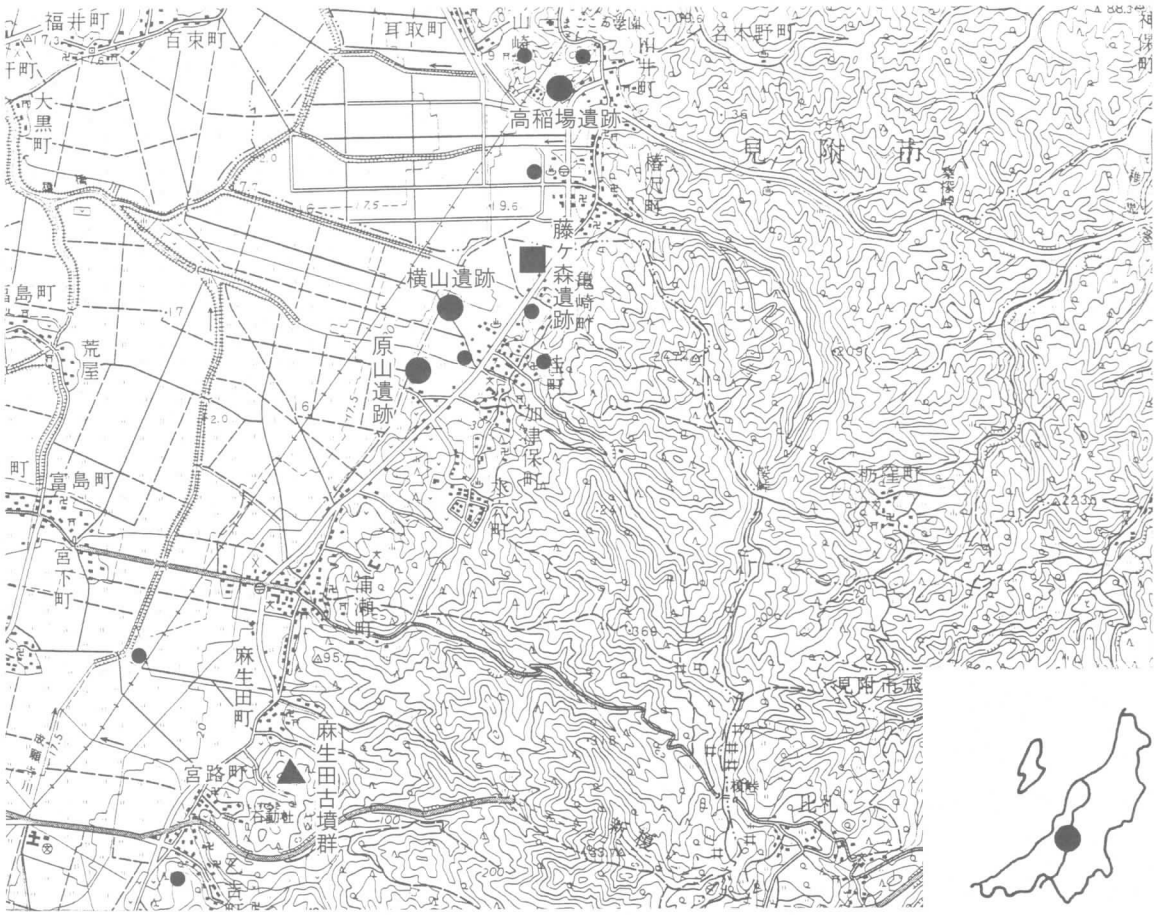
写真8　高坏出土状況、ハザ木列跡（北から、北東から）

1　発掘調査に至るまで

藤ケ森遺跡は、平成５年度実施の新潟県教育委員会による遺跡分布調査で弥生土器と石鏃が採集された新発見の弥生時代の遺跡である。平成７年度に弥生時代後期の横山遺跡と藤ケ森の２遺跡を含む地域で県営ほ場整備事業が計画された。このため、長岡市教育委員会は事業主体の新潟県長岡農地事務所（以下「長岡農地」と言う）や県営ほ場整備事業山北第三地区協議会（以下「協議会」と言う）などと、埋蔵文化財の保護を目的とした協議を数回行った。協議では、平成８年度に藤ケ森の範囲確認調査と、未周知の遺跡確認調査を行うこと、それに横山は昭和60年の発掘調査で遺跡全体を発掘したので、協議の対象としない、ことなどを話し合った。

平成８年度の調査は、４月に藤ケ森の範囲確認等の試掘調査を行い、10月に遺物が採集されている地点を中心に遺跡存在の確認調査を実施した。この結果、藤ケ森は南側の丘陵上で２基の墳丘墓（弥生後期）が確認され、平坦面に祭祀遺構の存在する可能性が高いことを確認するとともに、未周知の遺跡として五斗田遺跡（古墳・中世）が新たに確認された（駒形敏朗・鳥居美栄「長岡市内遺跡発掘調査報告書－藤ケ森遺跡・五斗田遺跡・三ノ輪遺跡・本途地区・土手端地区－」長岡市教育委員会　1997年）。

事業地内に所在する遺跡の具体的な保存計画について、平成９年度に長岡農地などと数回協議を行う。その結果、藤ケ森の平坦面は平成10年度に発掘調査し、墳丘墓は周辺一体を農村公園として整備する、五斗田は平成11年度から発掘調査を行って調査翌年に報告書を作成することなどで基本的に合意した。そして、平成10年６月から藤ケ森の祭祀遺構の存在が予想される平坦面を対象とする発掘調査に着手した。



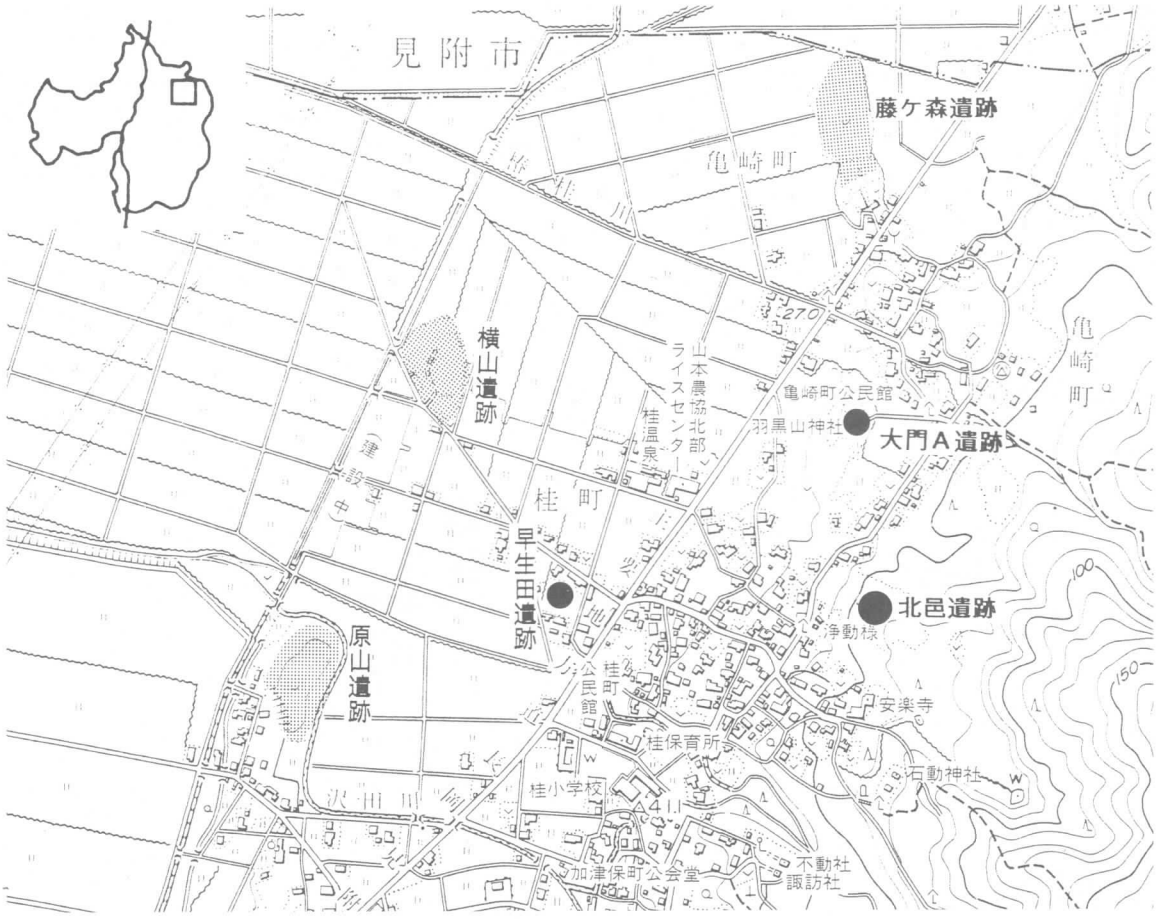
第１図　藤ヶ森遺跡位置図及び弥生遺跡（●）並びに古墳群（▲）（1/50000　長岡）

2　環境（第１図～第３図）

長岡市は、ほぼ中央部を北へ向かって流れる信濃川によって、市域を東西に大きく二分されている。左岸には上流からの河岸段丘が発達し、縄文時代の集落跡が点在している。それに対し、右岸側は南北に「東山丘陵」と通称される丘陵が連なり、東山丘陵に源を発する栖吉川や椿桂川などの中小河川が西の信濃川に向かって流れ、山裾から扇状地にかけて谷口扇状地などを形成している。

藤ケ森遺跡は信濃川右岸の東山沿いの見附市との境界に接する長岡市亀崎町に所在している。長岡市から見附市にかけては、環濠集落の横山遺跡・原山遺跡（以上、長岡市）、高稲場遺跡・岩沢遺跡（以上、見附市）などの弥生時代の遺跡が数多く点在している。これらの弥生遺跡は、東山丘陵の尾根や先端部、中腹の平坦面、それに丘が沖積地に浮かぶように取り残された「残丘」などに所在することが多い。横山や原山それに弥彦神社遺跡は残丘上に、東山丘陵の尾根上には高稲場、岩沢などが、中腹の平坦面には大門Ａ遺跡や北邑遺跡など、丘陵の先端部には早生田遺跡や藤ケ森などが位置している。

藤ケ森は、東山丘陵から西の沖積地に北へ向かって突き出た尾根の先端部に位置している。尾根の先端部は、今回の調査で確認された竪穴住居跡と方形周溝墓が検出された標高約26ｍの畑地の平坦面（以下「発掘区」と言う）と、墳丘墓が存在する標高約32ｍの山林部（以下「墳丘墓の丘」と言う）に分けられる。発掘区と墳丘墓の丘の間は、墳丘墓の丘を区切るように大きくくびれて窪んでいる。また、発掘区の周囲は、自然の傾斜面とは思えないような段があり、その下に水田が広がっている。おそらく、水田造成などによって旧状が大きく変化しているものと思われる。



第２図　藤ヶ森遺跡周辺の地形及び弥生遺跡（1/10000）

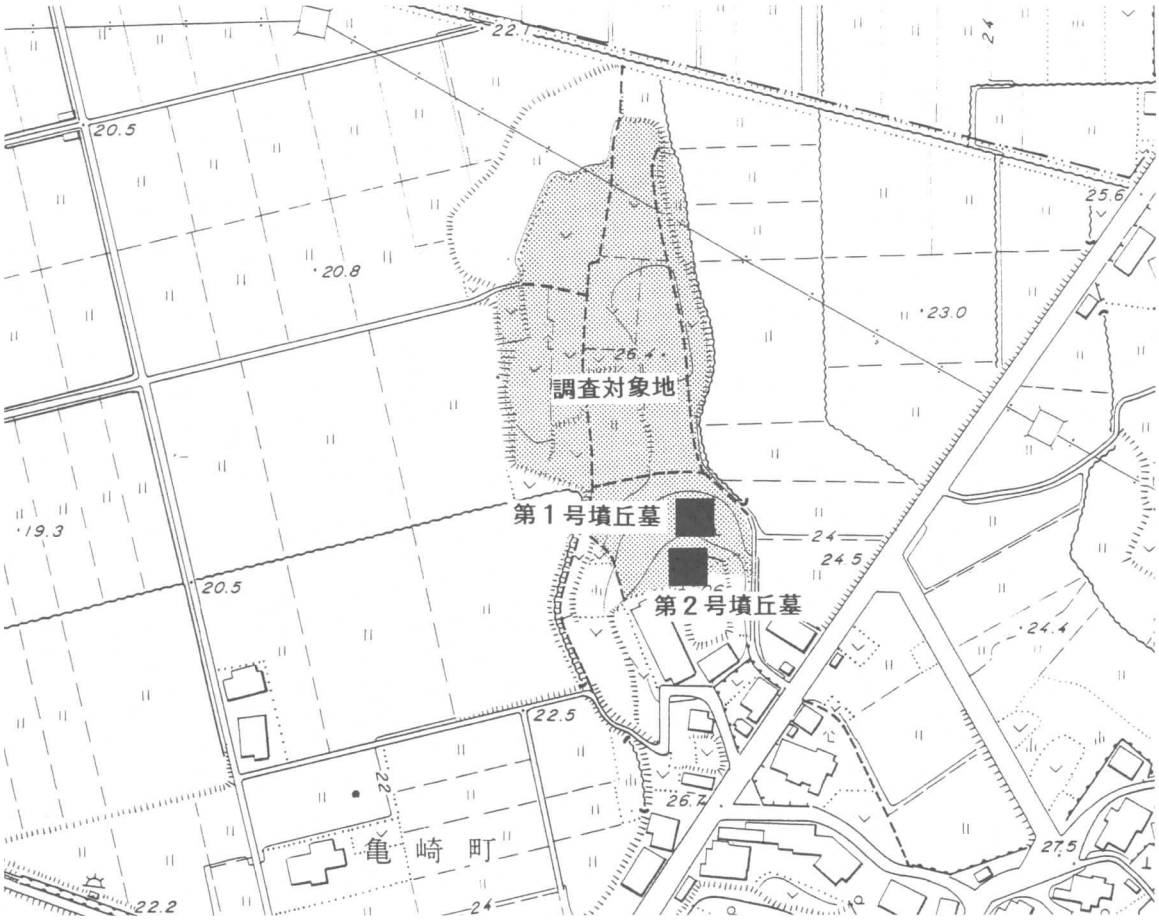
3　発掘調査の経過

確認調査後に新潟県教育庁文化行政課と遺跡の取り扱いについて協議を行い、次のことなどの指導を受けた。発掘区での遺物の出土状況は極めて少ないが、背後の山林に墳丘墓が確認されたことから、発掘区に祭祀遺構が存在する可能性が高く、遺構確認面の地山面までバックホーで掘削して遺構の有無を確認すること。これにより、藤ケ森遺跡の発掘区を対象にした発掘調査の方法は、基本的に次の手順で行った。

①遺構確認面の地山までバックホーで表土を掘削
②基本杭打設のため、発掘区のグリッド測量（測量会社に委託）
③ジョレンを使用して、地山面で遺構の確認調査
④確認した遺構の発掘
⑤発掘した遺構の写真撮影と測量
⑥墳丘墓を含む藤ケ森の遺構全体の平面測量（測量会社に委託）

また、発掘区の発掘調査と平行して、農村公園の一画に現状のまま保存されることになった墳丘墓の写真撮影と測量調査を行う。

藤ケ森の発掘調査は平成10年５月末日までに調査事務所を設置し、６月１日に調査機材の点検と搬入の準備を行うことから始め、６月14日までに調査機材の搬入などの諸準備を行い、翌15日から発掘作業員を動員して本格的な発掘調査（遺構確認）に入った。発掘調査は７月24日までに終り、現場で遺物や測量図面の点検などを行い、28日に調査機材と出土品などを撤収して現場における発掘調査を終了した。



第３図　藤ヶ森遺跡の地形（1/2500）

4　遺　構（第４図～第８図）

祭祀遺構の存在が予想された発掘区の発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡１棟、方形周溝墓１基、それに弥生土器出土のピットが２基、溝跡１カ所などが主なものである。その他に、かつての道路の両脇にあった稲を乾燥する施設のハザ木痕の列＝道路跡も発見された。

なお、遺構全体の測量図（第４図）の等高線は、発掘区では地山面で50cm、墳丘墓及び墳丘墓の丘は表土面での20cmの線である。

（１）竪穴住居跡（第５図）

位　　置：発掘区北西側で、水田と接する。

平面形態：隅丸方形

規　　模：７ｍ（南北の周溝間から）、東西は不明。

内部施設：地床炉、周溝、柱穴３本、貯蔵穴１、Ｌ字形の溝

炉　　跡：楕円形地床炉（長軸38cm×短軸30cm）

焼土の中心に直径８cm、深さ3.3cmの焼けていない部分があり、鍋や釜の土器を据えた位置であると思われる。

床　　面：床面全体に大小さまざまな炭化物（●）が広がっている。特に炉の周囲約50cmの範囲には、７×５cmから２×２cmのやや大きめな炭化物が分布している。炭化物は火の粉が飛び散ったものと考えられる。また、種類の同定できない種子（▲・△）と、骨が砕けたものと思われる白い微細な粒（■）が床面の随所で確認された（第５図下図）。

なお、柱穴及び貯蔵穴の側面の土は同じ色を呈し、異なる色のベルトは見られなかった。このことから、本住居跡は貼床の可能性はないと考えられる。

柱　　穴：３本（Ｐ１～３）。水田で削平された西側にも柱穴が存在した可能性が高く、合わせて主柱穴は４本と推定でき、もともとは４本柱をもつ住居であったと言えよう。

Ｐ１：掘り形をもつ柱穴で、掘り形は60×70cmの楕円形、確認床面よりの深さ46cm（底面の標高23.78m）。

Ｐ２：長軸55cm×短軸50cmの楕円形、確認床面よりの深さ41cm（底面の標高23.72m）。

Ｐ３：Ｐ１同様に掘り形をもつ柱穴で、掘り形は60×50cmの楕円形、確認床面よりの深さ66cm（底面の標高23.42m）。

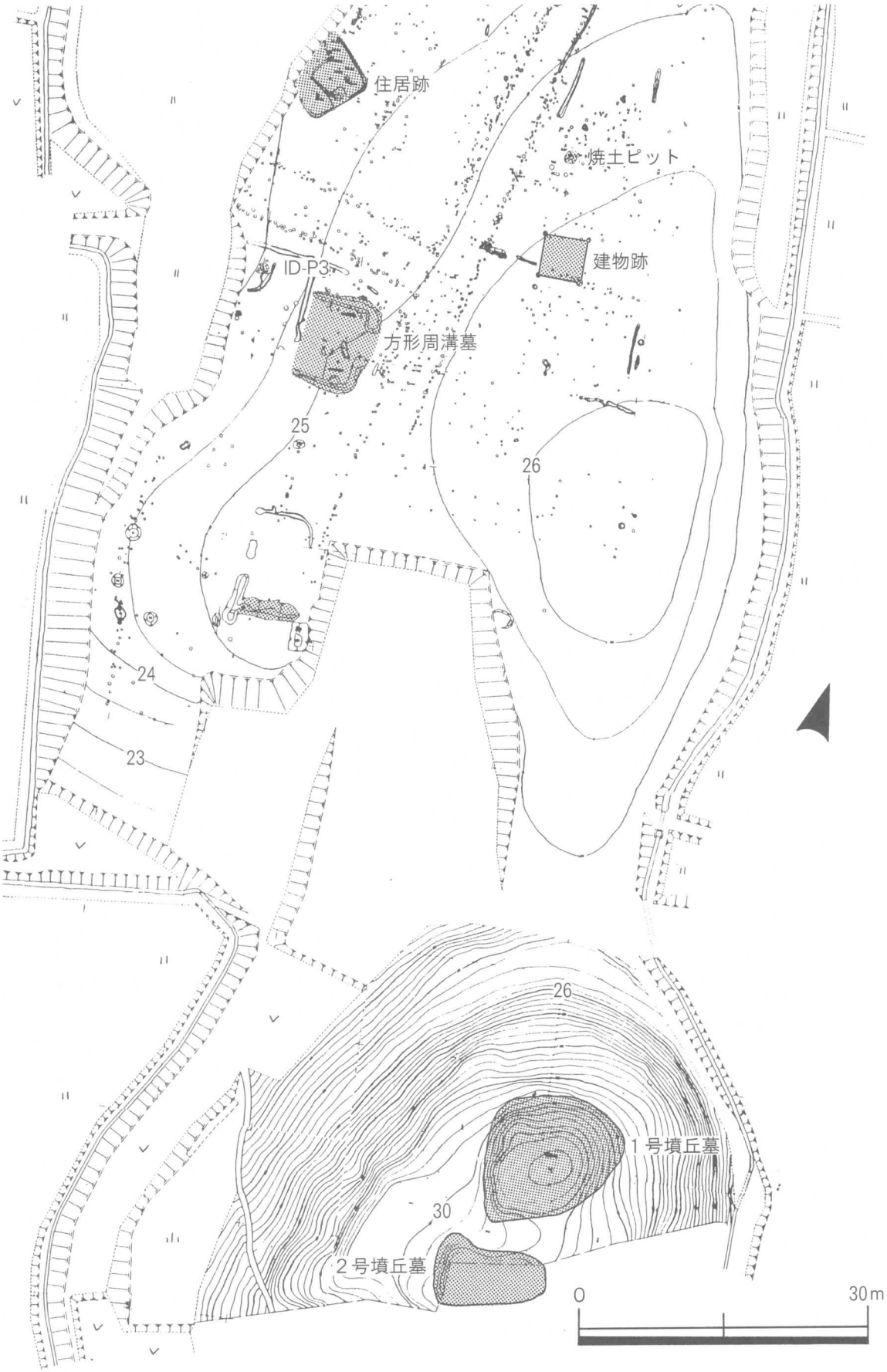
柱間間隔：Ｐ１－Ｐ２、Ｐ１－Ｐ３ともに約3.5mの等間隔で、西側に存在したであろう柱穴を加えると、正方形を呈するものと推察される。

周　　壁：東側の角で高さ３cmほどの壁が確認されたが、本来の壁の高さは不明である。

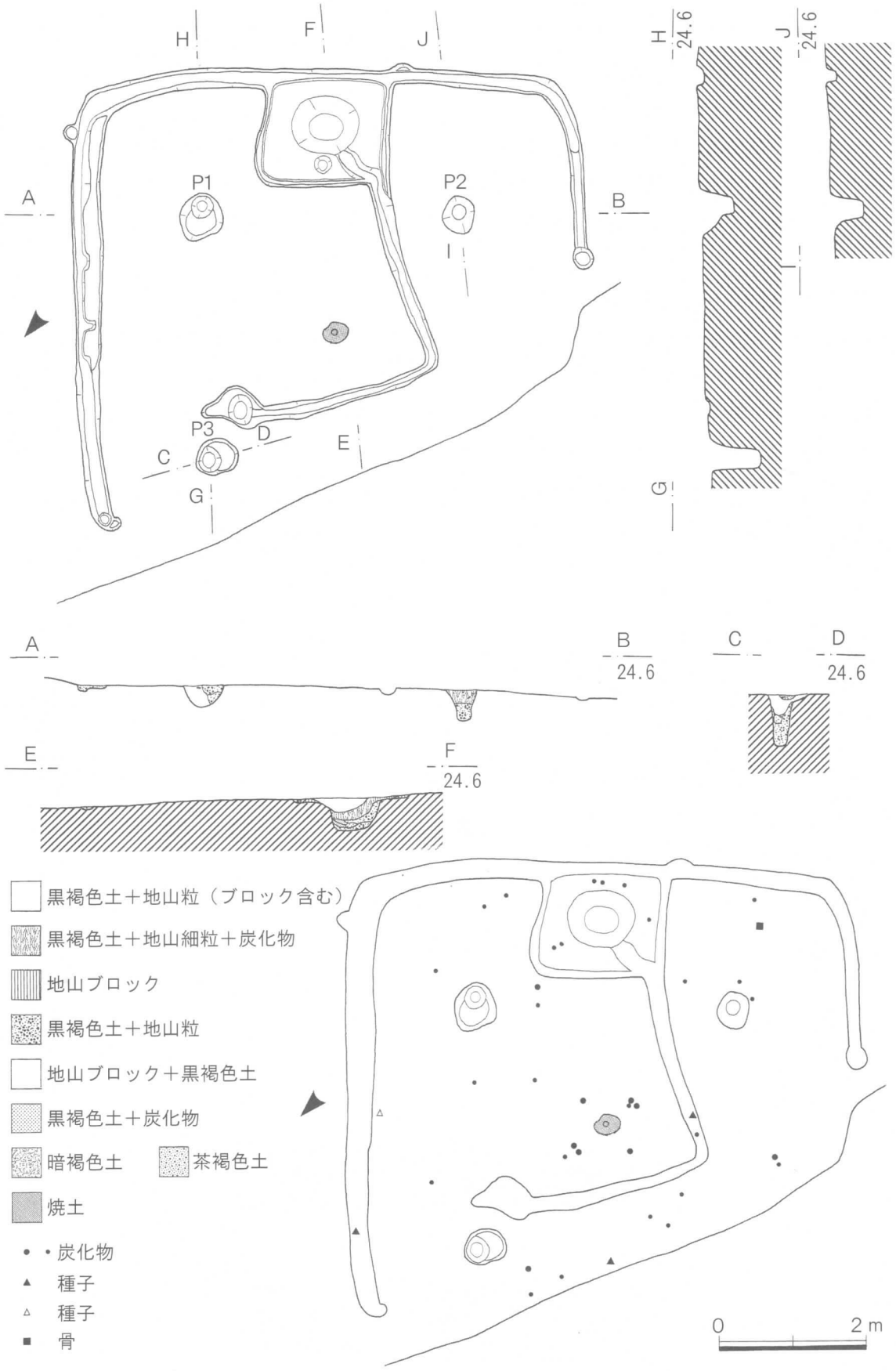
周　　溝：幅約15～40cm、深さ２～20cmが、東と北それに南側の一部で確認された。水田で削平された西側にも周溝は巡っていたものと思われる。

北側の溝の一部の断面で段が見られ、矢板列と思われる。周溝内の段はこの範囲だけで、他の断面はＵ字形を呈していた。また、周溝に付随するピットがあるがその性格は不明である。

貯 蔵 穴：東側の周溝のほぼ中央に、90×77cm、深さ46cmの楕円形のピットがあり、その周囲は方形に床面より一段掘り下げられている。ピットからは、西へ向かった後、北へ折れ曲がる溝が延びており、その先端にもピット（Ｐ６）がある。ピットは発掘当初、玉作用ピットと思ってピッ



第4図　遺構全体図（1/600）



第５図　竪穴住居跡（1/80）

トの覆土をすべてふるいにかけて玉作資料の検出に努めたが、石鏃が１本出土したほか、チップなど玉作に関係する遺物は何も出土しなかった。よって、貯蔵穴と判断したものである。

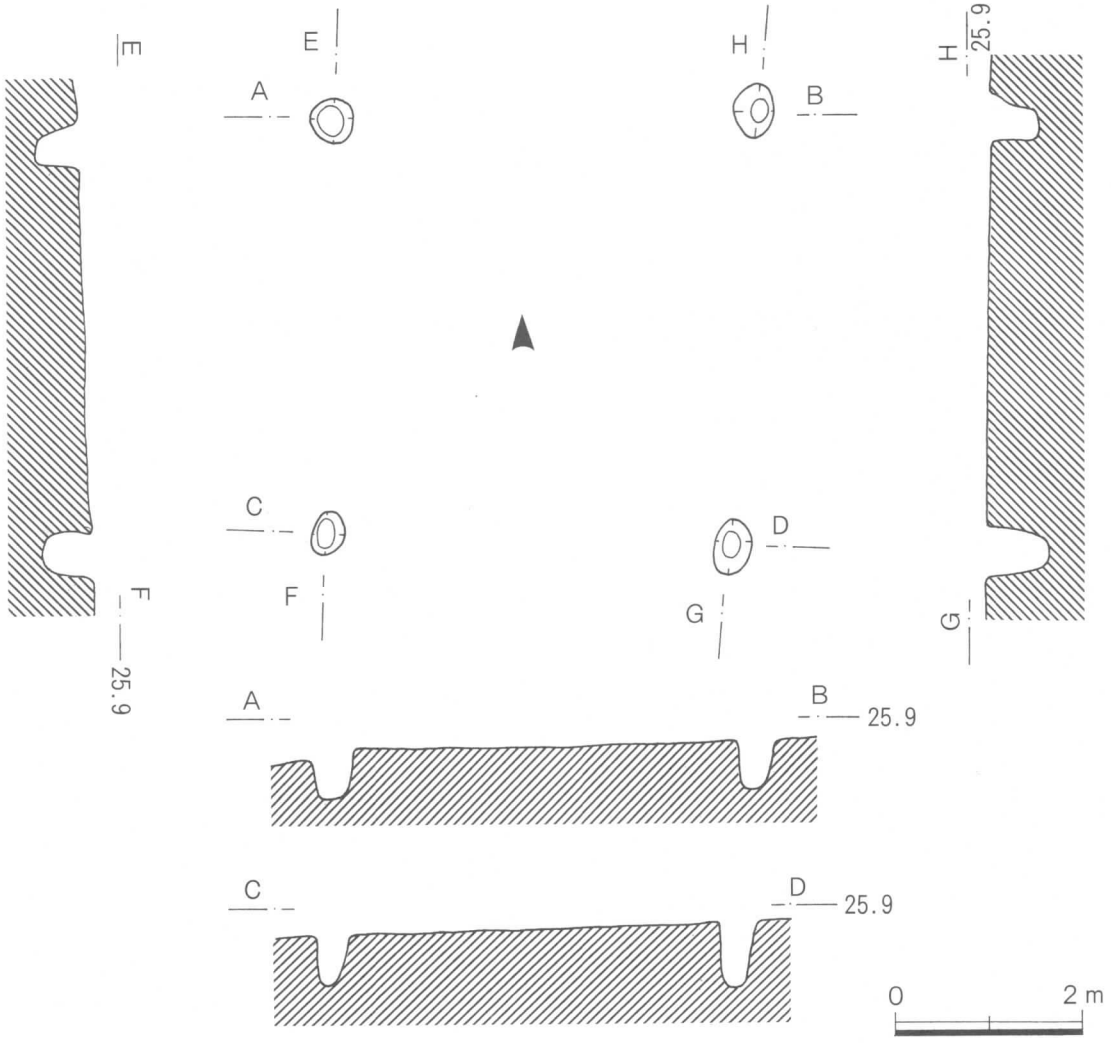
遺　　物：弥生土器（第11図１～13）、石鏃１点（第10図２）、炭化物、種子、骨（？）

時　　期：弥生時代後期が主体的な時期か。

そ の 他：本住居跡出土の土器には、弥生中期の櫛描文土器・山草荷式土器、弥生後期の天王山式土器、それに後期から古墳時代前期にかけての土器があり、本住居跡の時期を特定にするには極めて困難である。よって出土土器で多い後期が主体の住居跡とした。（駒形・相田）

（２）掘立柱建物跡（第６図　写真５）

南北に細長い発掘区のほぼ中央部の一番高いところに位置している。本建物跡の周囲にもピットがあるが、その中でピットの規模が群を抜いて大きくて、ほぼ方形に並ぶ４本のピットをもって、掘立柱建物跡と推定したものである。柱間は桁行・梁間ともに１間で、規模は桁行が590cm、梁間が540cmである。柱穴の規模は直径35～45cm、深さ55～70cm（底面の標高は浅い柱穴で25.14m、深い柱穴で25.04m）を測る。なお、版築土や礫などによる根固めは確認できなかった。弥生土器が数点出土しているが、実測できる土器破片はなく、掘立柱建物跡の時期の特定は不能で、ただ弥生時代の遺構としか言えない。



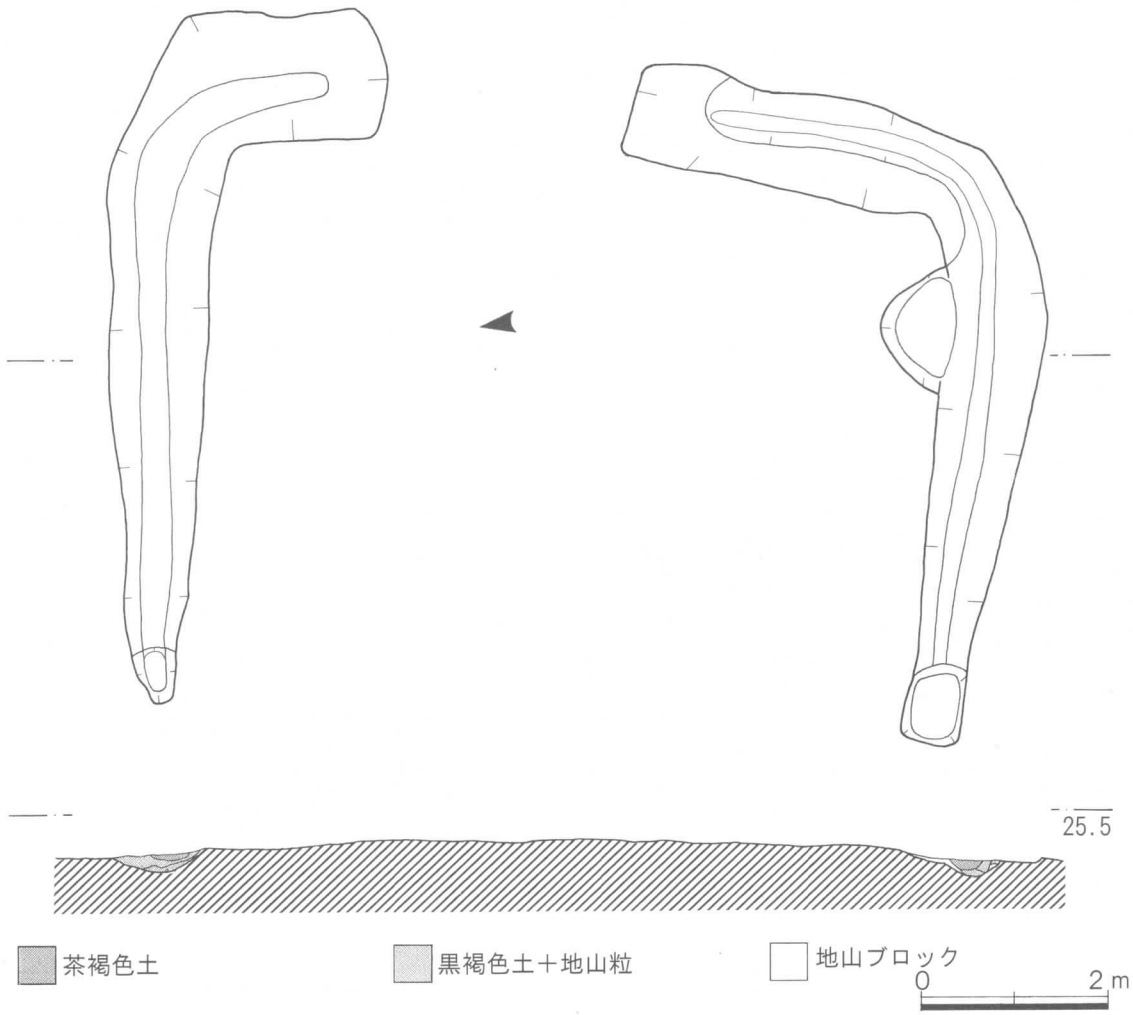
第６図　掘立柱建物跡（1/80）

（３）方形周溝墓（第７図　写真５）

方形周溝墓は発掘区の中央部西側に位置している。方形周溝墓の溝は東、南、北の三辺でしか確認できず、西側の溝は検出できなかった。南・北辺の周溝は東辺の周溝とは隅丸の角でつながり、西で途切れて先端部に方形のピットがそれぞれ位置していた。東辺の周溝は、中央部のやや北側で途切れている。端部は箱形を呈してやや東に向いて開いていた。端部が東側を向いて開く状況から本方形周溝墓は、前方後方形の可能性が指摘される。なお、方形周溝墓の主体部は確認できなかった。

方形周溝墓の規模は、計測できた南北の周溝間で約10ｍを測る。溝幅は東の途切れる２カ所が一番広く、上端が広いところで１～1.34m、南・北辺周溝の西端の狭いところで50cm、下端は20～25cmである。深さは南・北辺のコーナーが22cm、他の部分は15cm前後と、全体的に浅いという印象を受けた。

方形周溝墓の地山面は、西に向かって50cmほど傾斜し、かつ西側は一段低くなっていた。このため、西辺の溝は確認されなかった。前方後方形の可能性がある本方形周溝墓は、前方部の溝や主体部を確認できないこと、それに南北の周溝の深度が平均的であることから、本来的には傾斜面に前方後方形の方形周溝墓が位置していたが、開墾等で前方部の周溝や主体部までも削平されたと考えられる。なお、遺物は弥生土器の小破片が出土しただけで、詳細な方形周溝墓の時期は不明である。



第７図　方形周溝墓（1/80）

（４）ピット（第８図　写真６・８）

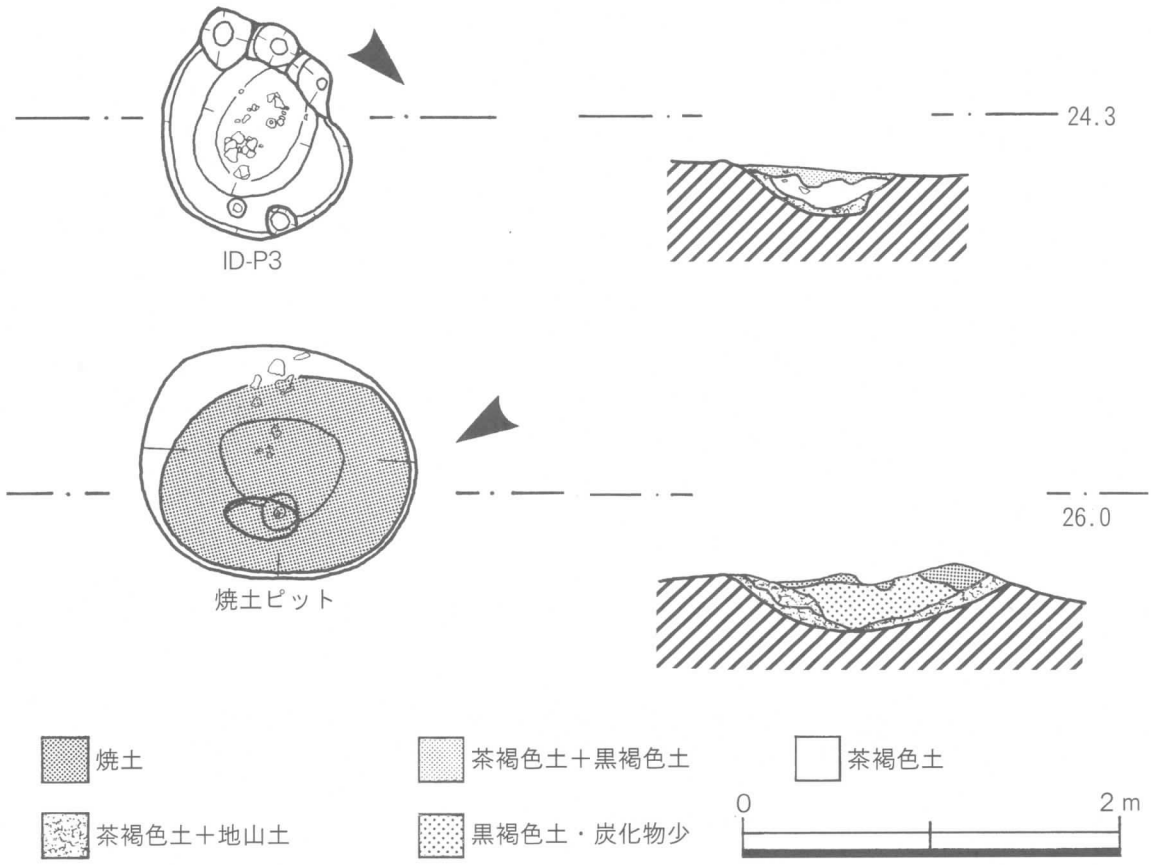
今次調査では、直径及び深さとも大小さまざまな円形のピットが多数発見された。弥生土器などの遺物が出土したピットは次に紹介するピットなどごくわずかで、大半は無遺物のピットである。

◎焼土ピット（第８図　写真６）

覆土上面に焼土が覆っていたピットで、便宜上「焼土ピット」とする。発掘区西寄りのほぼ中央部に位置していた。平面形態は押し潰されたような楕円形で、規模は長軸150cm×短軸130cm。断面は深さ38cmの浅い皿状である。焼土はピット上面のほぼ全面を覆い、堆積は厚いところで15cmを測る。弥生後期の天王山式土器（第11図21～22）、弥生後期から古墳前期（14～20・24～27）などの土器が覆土やピットの壁際などから出土し、焼土及び覆土上位から石鏃（第10図３～５）が３点出土した。焼土ピットは、出土遺物から弥生後期の遺構であると考えられる。だが、性格づけについては今後の課題としたい。

◎ＩＤ－Ｐ３（第８図　写真７）

直径約110cmの不正円形を呈する皿状のピットで、深さは深いところで約25cm。方形周溝墓の西側で、一段低い水田に近いところに位置していた。弥生後期末の月影Ⅱ式土器（第11図33）や碧玉の破片が覆土の下部から底面にかけて出土した（写真７）。碧玉の破片が数点出土していることから、玉を製作した工房跡の可能性も考えられるが、その詳細は不明である。



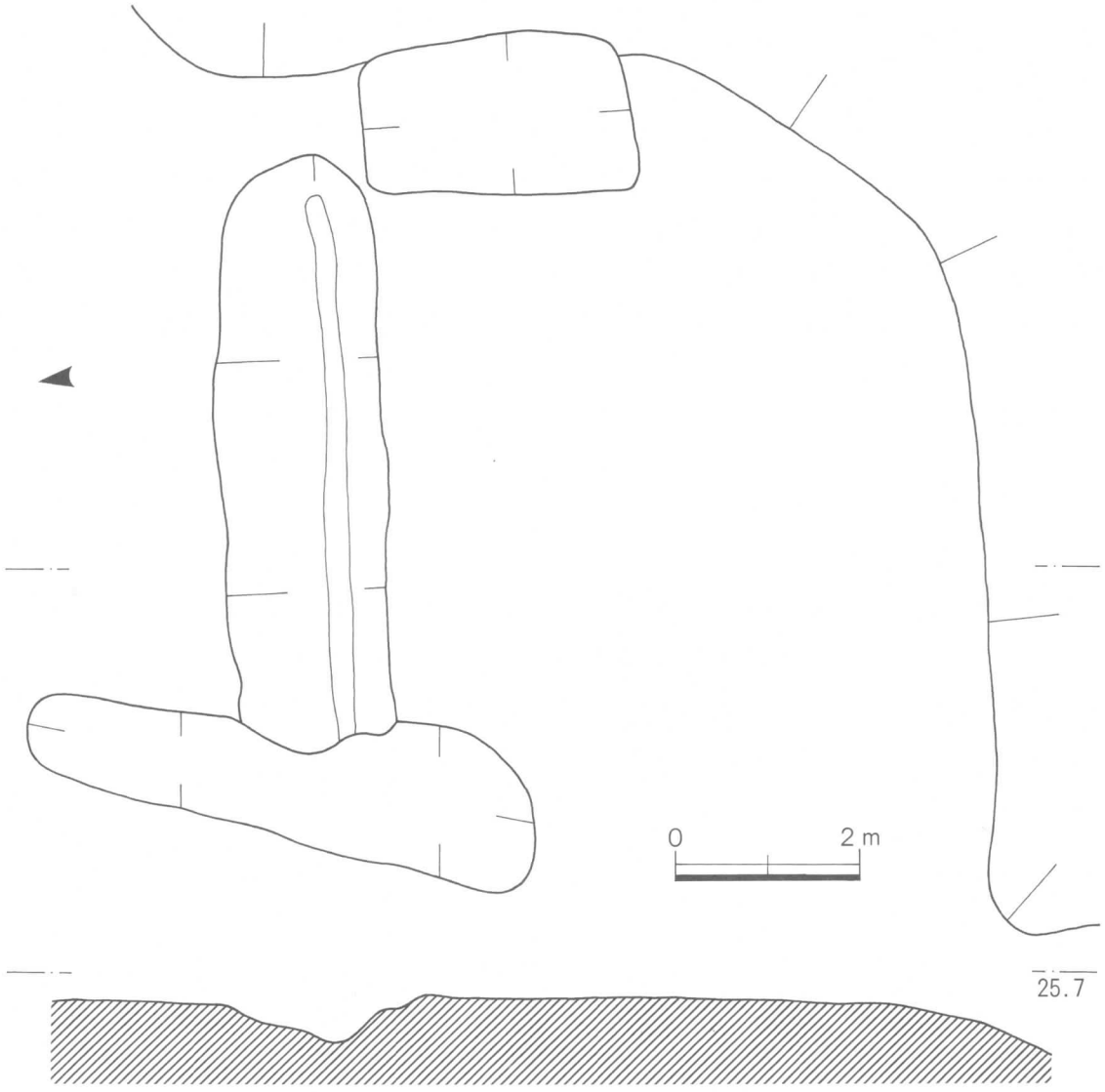
第８図　ピット（1/40）

◎ハザ木跡（写真８）

また、調査地西側を南北と、ほぼ中央部から西の水田に向かって延びる直径20cm前後、深さ20～30cmほどのピット列が確認された（写真８）。中には近世・近代の茶碗の破片を出土したピットもある。このピット列は地元民の話などを総合すると、農道の両脇に立ち並ぶ稲を乾燥する「ハザ木」の痕跡と判断される。ハザ木の列から農道の幅は１間（180cm）と推定される。今では地図上にもない農道である。

（５）溝跡（第４・９図）

発掘区南西側で、上端幅約1.8m、下端約20cm、深さ25cmの溝が検出された。溝からは古墳前期に属する高坏の脚部が１点（第11図35）出土した。溝の西端は撹乱溝で寸断されて溝の延長も不詳である。溝の東から南にかけて水田造成などで旧状が大きく削られていることや、東西に２カ所の撹乱溝が存在するなど、溝跡周辺の状況は不明である。だが、西及び南北にこの溝に対応する方形区画の溝が確認されないことから、方形周溝墓の可能性は少ない。溝跡は北側の竪穴住居や方形周溝墓が存在する地域と、南の墳丘墓の丘とを区切る目的で、東西ラインに設定した溝の可能性もある。



第９図　溝跡（1/80）

5　遺物（第10・11図）

今回の発掘調査では、コンテナ箱換算で３箱の土器、石鏃８点、管玉１点が出土した。

（１）土器（第11図）

弥生土器の甕・壷・台付鉢、古式土師器の甕・壷・高坏・小型甕か鉢、須恵器の甕、珠洲焼が出土した。

竪穴住居跡出土（１～13）　竪穴住居跡及びそれに伴うと思われるピットから出土したもの。いずれも小片で完形になるものはない。弥生時代中期の北陸系櫛描文（１）と東北系山草荷式土器（６・７）が最も古い。８～10は弥生時代後期、東北系天王山式土器の甕。２～５は甕の口縁部片で、弥生時代末から古墳時代前期に収まる。３は器厚から小型丸底壷の可能性もある。11・13は甕の底部、12は壷の底部で、弥生時代後期から古墳時代前期に収まる。11の内面には爪痕があり、炭化物の付着も認められる。

焼土ピット出土（14～28）　22は天王山式土器の壷口縁部片。21も地文・胎土・焼成の点から天王山式土器の甕体部片と考えられる。14～17は甕か壷の口縁部片。口縁端部を若干つまみ上げる形状から、いわゆる弥生時代後期後半から古墳時代前期、北陸北東部系土器の特徴をもつ。18・19は壷、20は甕。弥生時代後期末から古墳時代前期の所産であろう。23は高坏の坏部。古墳時代前期か。24～27は甕か壷の底部片で、弥生時代後期から古墳時代前期。28は須恵器の甕体部片。

ＩＤ－Ｐ３出土（29～34）　29・31・32は壷か甕。30は鉢。33は台付鉢。34は高坏。33は弥生時代後期末、北陸の月影Ⅱ式併行期に特徴的な器種である。

溝出土（35）　35は高坏。古墳時代前期の所産とみられる。

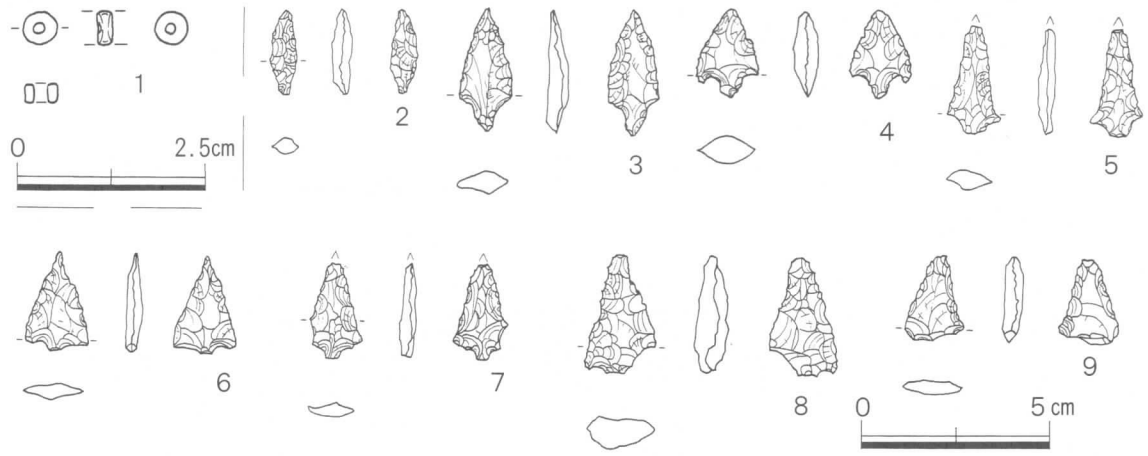
その他のピット・包含層出土（36～52）　36は山草荷式土器。37・38は波状文・平行沈線文、39・40・47は撚糸文、45・46は連弧文等が認められ、天王山式系の土器。41～44は甕か壷の口縁部で、41は口縁端部外面に３条の擬凹線文が認められる。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の時期幅に収まる。48は甕で、櫛状工具による刺突があり、月影式の特徴をもつ。49は小型甕か鉢、50・51は高坏。50は坏部内面に赤色塗彩が一部残る。弥生時代後期後半の法仏式併行期か。52は須恵器の甕体部片。

（２）石鏃（第10図２～９）

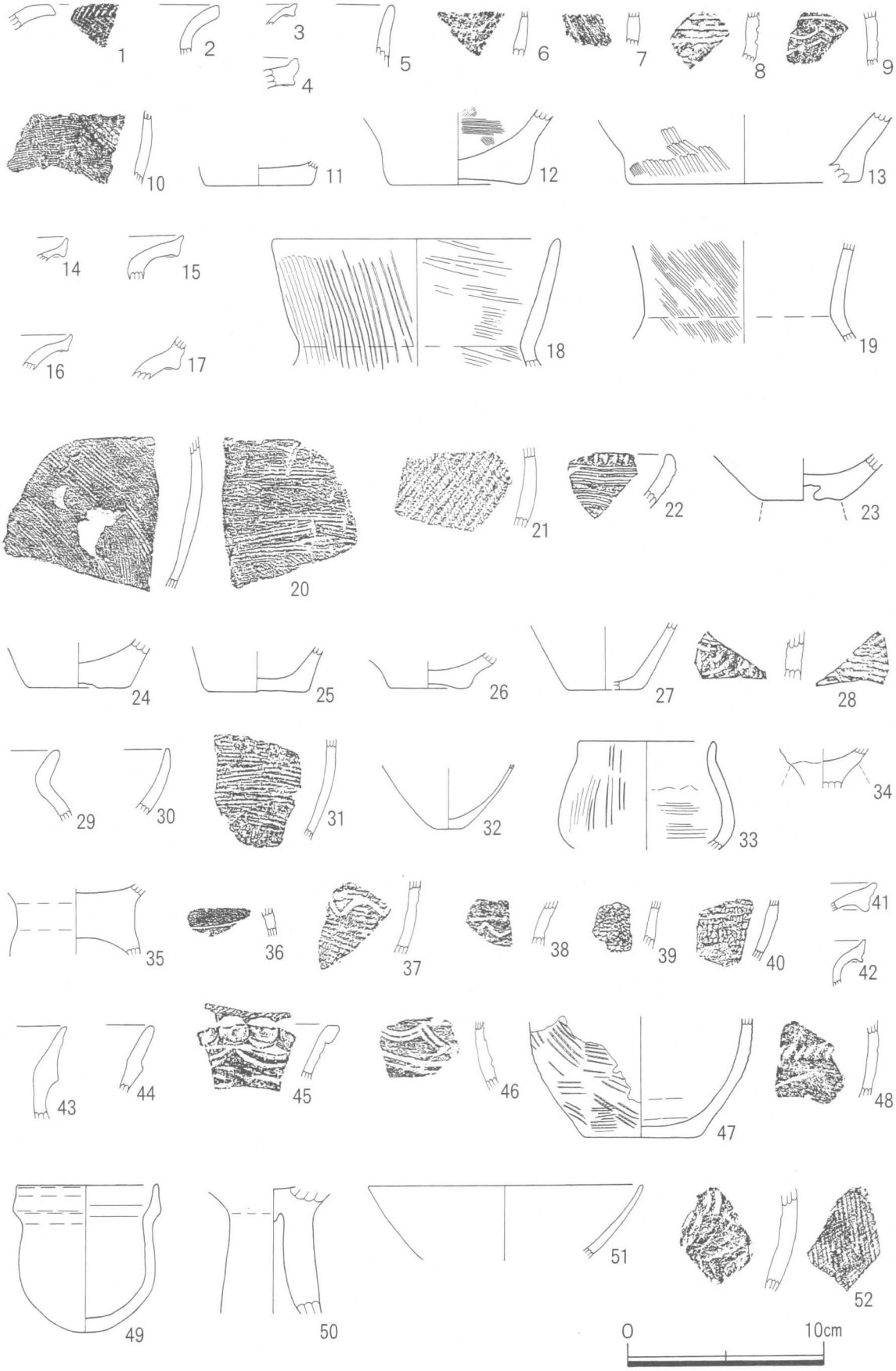
８点出土している。このほかにも、平成８年度の確認調査などにも数点が採集されており、石鏃の出土が多い。２は竪穴住居跡の貯蔵穴から、３～５は焼土ピットからの出土である。

（３）管玉（第10図１）

ＩＣから出土。管玉の破損品とみられるが、臼玉の可能性もある。碧玉の破片がＩＤ－Ｐ３などからも出土し、玉作りが行われた可能性もあるが、積極的な玉作り関連資料は出土していない。（鳥居）



第10図　玉（1/1）、石鏃（1/2）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
0
10cm

第11図　出土土器

6　墳丘墓（第12図）

藤ケ森の南側の丘陵上に、２基の墳丘墓が南北方向に並んで所在する。墳丘上及びその周辺には杉や雑木などのうっそうとした林となっている。下草刈りを行った結果、地表面から多数の土器片が採集された。

平成８年度の調査では墳丘の形態と規模を大まかに把握するための略測を行い、あわせて第１号墳丘墓の２カ所に試掘坑を設けて、主体部埋葬施設の規模・形状等、それに墳丘規模の確認を行った。その結果、主体部と思われる落ち込みを４基と周溝の一部を確認した。また、主体部上及び周溝内から出土した土器は、弥生時代末から古墳時代前期初頭の特徴を示していた。今回の調査では、墳丘墓の規模・形状及び周辺地形をより正確に把握するため、20cmコンタで測量調査を行った。

第１号墳丘墓　　墳丘の残丘部は、東西約13m、南北約15mの範囲に収まる。墳頂平坦面はやや北東と南西方向に張り出す楕円形で、長軸約８m、短軸約５mである。北西の張り出しは、杉の生育によるものと思われる。西側の残丘部は直線的な形状を示しているが、前回の調査で確認した周溝の位置から、この形状は削平によるものと判断できる。北側の残丘部は、南側に比べて張り出している。墳丘高は北側で約１m40cm、南側で約40cmを測る。

第２号墳丘墓　　墳丘の残丘部は、東西約11m、南側は削平されているため、南北長の規模は不明である。墳頂平坦面及び残存する墳端線の形状は方形に近い。墳丘高は北側で約60cm、西側で約80cm。（鳥居）

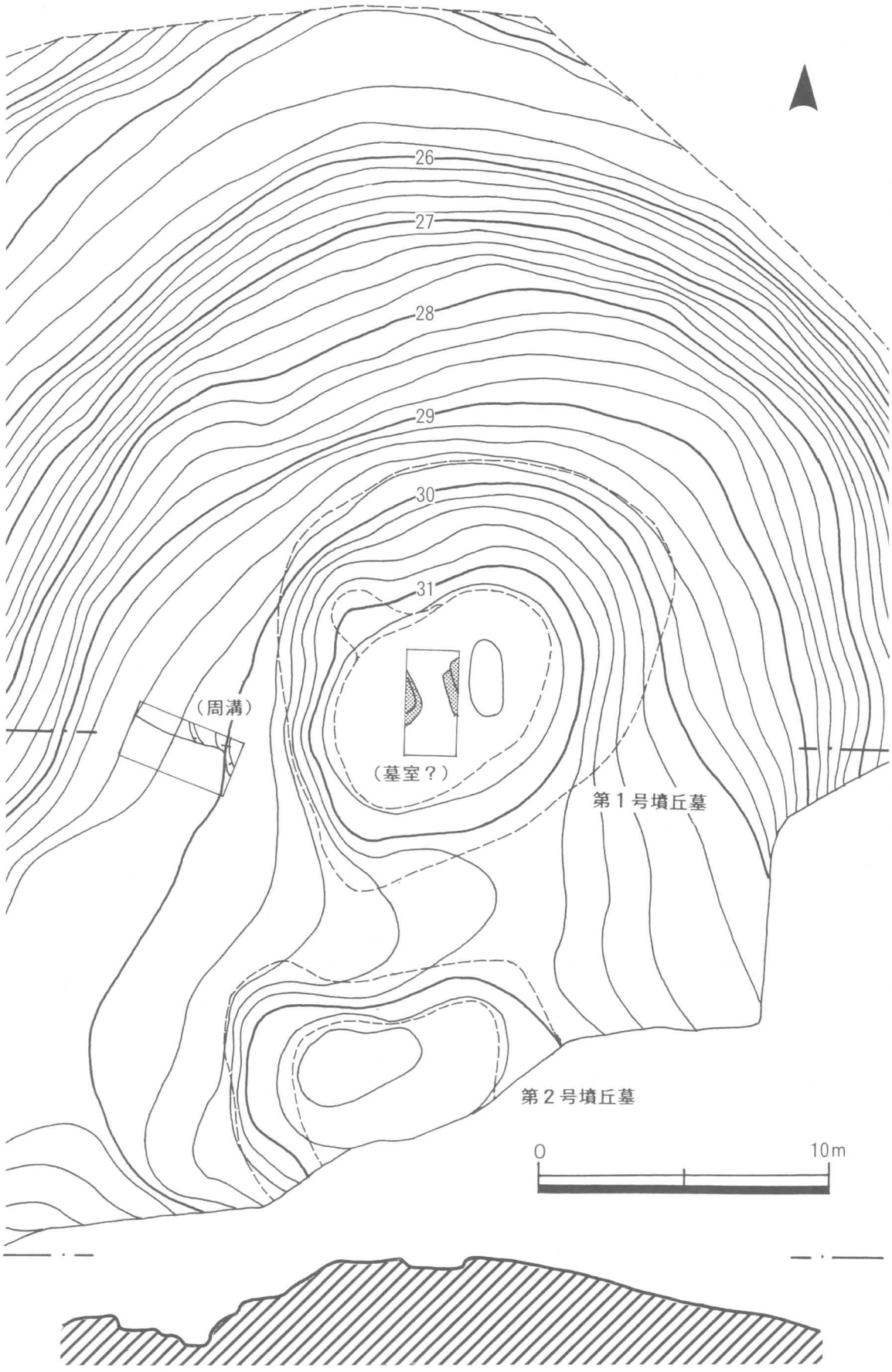
7　まとめ

藤ケ森の発掘調査は、墳丘墓の丘にある方形台状墓に関係する祭祀遺構の確認を発掘区で行うことを目的に実施した。調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、焼土ピット、その他のピットなどの遺構と、少量の弥生土器・土師器・須恵器、石鏃、管玉の破片などが発見された。この中で発掘区の中央部に位置する掘立柱建物跡が、方形台状墓を見上げる位置にあることから当初予想の祭祀遺構に類するかと思われるが、祭祀に関する遺物が出土しないこともあってその確証は極めて少ない。

また、発掘区のほとんどが既に削平されており、竪穴住居跡や方形周溝墓は全体の規模や形態をつかむことはできなかった。これらの遺構は中央部の掘立柱建物跡以外は西側に偏り、東や北側では確認されなかった。このため、竪穴住居跡はこの１軒だけだったのか、集落を構成する規模で存在していたのかなど、発掘区における遺構の全体像は不明である。ただ、横山遺跡で確認された環濠は発掘区には存在しない。

ところで、藤ケ森には形態の異なる弥生時代の墓が２種類存在する。藤ケ森の墓は、丘の上にある２基の方形台状墓と、発掘区に位置する前方後方形の方形周溝墓である。方形周溝墓は横山での１基のほか、県内各地で確認されているが、方形台状墓は新潟県内で初めての確認である。前方後方形の方形周溝墓は、弥生後期に存在が確認されているが、藤ケ森の方形周溝墓は時期の分かる土器は出土せず、詳細な時期の特定はできなかった。このため、弥生後期後半の方形台状墓と方形周溝墓は同時期に存在したのか、あるいは時間をおいて造営されたのかは不明である。また、高坏を出土した溝が、標高差をもって存在する２種類の墓の区域を区画するために設けられたことも考えられるが、時期の比較などができないためにその確証は極めて少ない。ここではその可能性が残されていることを指摘するに止めたい。

なお、藤ケ森の方形台状墓は、長岡市から見附市にかけての東山の裾に存在する弥生集落全体の盟主的な存在の墳墓なのか、あるいは藤ケ森だけの墳墓なのかも今後に残された課題のひとつである。



第12図　墳丘墓実測図（1/200）

報 告 書 抄 録

ふりがな	とうがもりいせき
書名	藤ケ森遺跡
副書名	県営ほ場整備事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	駒形敏朗・鳥居美栄・相田智子
調査機関	長岡市教育委員会
編集機関	長岡市教育委員会
所在地	長岡市柳原町２番地１
発行年月日	1999年３月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
とうがもりいせき 藤ケ森遺跡	にいがたけんながおかし 新潟県長岡市 かめざきまちとうがもり 亀崎町藤ケ森	15202	297	37°29′06″	138°55′40″	19980601〜19980728		ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤ケ森遺跡	集落跡	弥生時代中期〜後期	竪穴住居跡 1 掘立柱建物跡 1 方形周溝墓 1 焼土ピット 1	土器 コンテナ３ 管玉破片 1 石鏃 5	墳丘墓２基

北東から
（左に墳丘墓の丘）

西から

近景（発掘中）

写真１　藤ヶ森遺跡遠景

近景

（発掘現場から）

第１号墳丘墓

第２号墳丘墓

写真２　墳丘墓

表土除去及び遺構
確認作業

遺構発掘

竪穴住居跡発掘

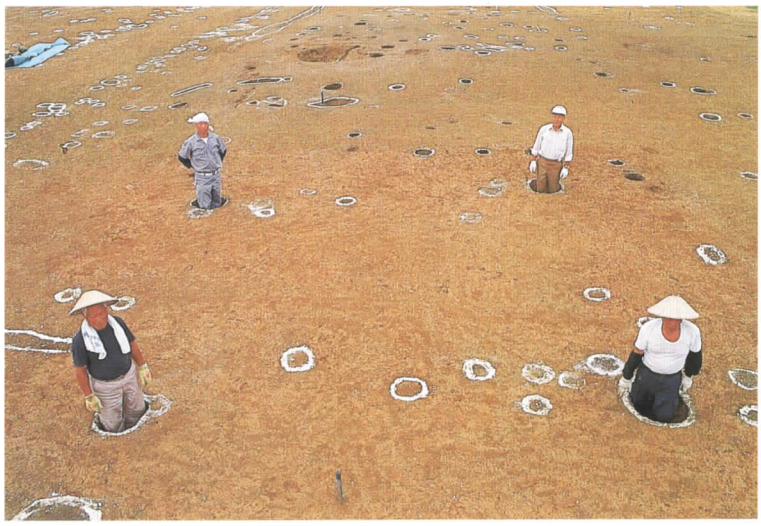
写真３　発掘風景

全　景

ピット内の土器出土状況

炉跡周辺の炭化材

写真４　竪穴住居跡



掘立柱建物跡

方形周溝墓（東から）

方形周溝墓（北から）

写真５　掘立柱建物跡・方形周溝墓

全　景

土器出土状況

石鏃出土状況

写真６　焼土ピット

ID-P3（全景）

ID-P3
（土器及び碧玉出土状況）

管玉出土状況

写真７　ID-P3・遺物出土状況

高坏出土状況

ハザ木列跡（北から）

ハザ木列跡（東から）

写真８　遺物出土状況・ハザ木列跡

藤ヶ森遺跡
－県営ほ場整備事業に伴う発掘調査－

平成11年３月20日印刷　平成11年３月25日発行
発行：長岡市教育委員会　　印刷：吉原印刷株式会社